

# 説得術の実際 (1)

神谷正彦\*

## Practical persuasion (1)

Masahiko Kamiya\*

### はじめ

説得術、という体系立てて確立された論法があるわけではない。人が人を説得する場合、一対一あるいは一対多数という量的問題がある。「説得する側」の人と「説得される側」の人との人間関係の位相といった質的問題も考慮しなくてはならない。

「なるほど、その通りだ。」と納得させ、望む行動を取らせることは容易ではない。容易ではないがそうやって人を説得できないと、学生は明確なりポートが作成できない。企業の面接にも失敗し、よしんば入社できたとしても今度（商品や企画の）プレゼンテーションができなくなる。

このようなことは今改めて私が述べなければならないことだが、今だからこそ、見直さなければならないところへ来ている、との感懐も強い。書店の店頭には、わかりやすい表現や説明の方法を説いた書物が目立つようになった。今夏の、高等専門学校教員研究会（文部科学省主催）の検討テーマの一つは「国語コミュニケーションスキル教育の評価と改善」である。問題はけっこう深刻なのだ。なぜ深刻かという点、初めに述べたように、万民を等しく説得できることはもとより存在せず、説得する側の表現能力に能力差が大きく説得される側の理解能力にもばらつきがあるからだ。これが現実である。この分野のハウ・ツー物は今後も続々と登場するにちがいない。はたして、話し手・聞き手としてことば、それらが等価の問題として正面から論じられる日が来るのかどうか。私はそこに磯に過ぎぬ一石を投じてみたい。

### 一

本来は「説得する側」「説得される側」「説得のことば」が、父・子・聖霊のように三位一体でなければならない。しかし、人間の表現資質や理解力はさまざまであって、満足できるその水準も設定することは難しい。かりに、ごく限定された話し手と聞き手の間でのみ説得が成功したとしても、何の意味もない。ことは普遍性を必要とする。一政党の党内論理で日本の政治が動くはずもないのである。そういう特定の集団内ならば双方の暗黙の了解があつて、いわば予定調和のような状況が期待できるからである。

そうだとすると、複雑多様な人間のほうではなくて、説得のことば、その言説を水先案内人として考えていくほうがよい。ただし、ことばもいままでもなくその表現力は有限であるから肝に銘じなくてはならないのは、

一、定義を必要とする語についてはそれを可能な限り明晰にすること。  
二、特定の集団・組織内でのみ理解されるような専門用語を安易に濫用しないこと。

三、広く一般に用いられる語によって、けつして一般的でない論理が形成される場合を戒めること。独断と偏見は説得の天敵である。

説得とは人が人を諭すことである。両者はあくまでも対等、いやむしろ、説得する側が相手に対し謙譲の念をもっていなければならない。権力を背景にした「大本営発表」はもつてのほかとしても、相手の理解度を忖度せずに煙に巻いても説得ではない。「人を見て法を説け」という諺もある。

説得のことばに必要なものは、まずそのことばの（あるいは論理の）客観性である。主観的な、情意の勝つたことばで説得しても、たとえ一時的な成功を収めたにせよ、やがて覆されることになる。情意とは違つが、内容の空疎なものをこまかすために、いわゆるカタカナ語つまり外来語を頻発する場合も、説得にとつては禁忌である。

次に、説得を成功させる条件として、「相手が気づいていない、または見過ごしている事実」を提示すること、である。たとえば、仏教の宗派間の争いに對し「宗論（宗派間の論争）は、どちらが勝つても釈迦の恥」と諫める類をいう。あるいは、親子間の軋轢には「年寄笑うな行く道じゃ、子ども叱るな来た

\* 総合教育科

道じゃ」。食べ物を粗末にする子に、「人間の食べる物はみな生き物なんだよ。余命を憂える老夫に妻が「散る桜 残る桜も 散る桜」。

多数の賛同者を擁する多数派が陥りやすい誤りがこの「事実の見落とし」である。ここで唐突になるが、92アメリカ映画「セント・オブ・ウーマン」(邦題「夢の香り」)を例に引いてみよう。

伝統あるアメリカ東部のハイスクールで一つの事件が起こる。厳格な教育方針がモットーの校長がその功績によって理事会から贈られた自動車に、三人の学生がペンキをぶちまけた。それを目撃したチャリー(主人公)とジョージはさつそく校長に呼び出されて糾弾される。ジョージは何も見えていないと主張、チャリーは目撃したがその名は言えないと抗弁。大学推薦の取消まで持ち出して黙否を続けるチャリーに業を煮やした校長は、全校集会を開いて査問にかける。ジョージは前言を翻し三人の名を挙げて退学を免れるが、頑として証言を拒むチャリーは退学が必至と思われた。この時彼の弁護を買って出た退役軍人のフランク中佐は訴える

「この学校がいかにも多くの国家的指導者を輩出してきた伝統校であるところ、その実体は腐り切っている。なぜなら、親の庇護に逃げた密告者のジョージを許し、自分の将来を賭けて友情に殉じるチャリーを追放しようとしているからだ。彼は決して自分の得のために友人を裏切らなかつた。その高潔さ、その勇氣こそ真の指導者の資質である。困難だが正しい道を選んだチャリーの清らかな魂こそ、この学校の根本精神にふさわしい。」と。(要約筆者)チャリーは無罪となり、会場を埋めた学生たちの万雷の拍手に包まれる。

第三に、相手の予期していない展開をぶつける方法がある。意表を突いてみること相手の硬直してしまつた思考にゆさぶりをかけ説得を成功させる方法だ。

簡単な例でいえば、美味しい酒がボトルの半分になつてしまつたとき、

「あと半分しかない」とは思わずに、

「まだ半分も楽しみが残っている」と考えれば、悲觀的だつたものが樂觀的なものへ転化する。

「徒然草」にはこういう例が多く見られる。第九十二段「ある人、弓射ることを習ふに」では、「初心の人、二つの矢を持つことなかれ。」と弓の師が諭している。矢が二本あれば、人間誰しも初めの矢を射る時に二本目を当ててにして

集中心を欠く、というのである。

第九段「高名の木のぼりといひしをのこ」では、評判の木登り名人が高い木に人を登らせて仕事をさせたが、その間は何も言わず、軒の高さほどに降りてきた時初めて気をつける声を掛けている。それは何故かと問われて答えるには「あやまちは、安き所になりて、必ず仕る事に候」。意外な振舞にはきちんとして理になつた根拠があつたのである。

あちこち例が飛ぶが、春風亭柳昇の、嫁姑のいさかきを扱つた噺がある。姑に散々いびられたため実家の母に姑への恨みをぶちまける娘を母がなだめる話。意外な展開があつて、母は娘に「我慢せよ」とは言わないで、小さな紙包を渡すのだ。そして、いいかい、これは可愛い我が娘に理不尽なことをする姑を亡き者にしてしまふ恐ろしい毒薬だからね、こつそり持つて帰つて隠しておきなさい。すぐに使つてはいけません。姑に恋事があれば真先におまえが疑われるんだからね。使つのはいつでも使えるのだから、その前に疑われぬように一工夫しておきなさい。お姑さんにどんなひどい事を言われようと、身も心も尽くして、いい嫁になり切ること。近所でも評判になるくらいのできた嫁なら誰も怪しむことはない。それも、短い間ではだめで、お姑さんを見事にだましおおせるまで、尽くし抜いてごらん、それからならおまえの恨みを晴らしてもだいいじょうぶだから。」娘はこれも母の愛情かと、紙包を持つて帰る。それからというものの、嫁の陰日向のない孝行ぶりに初めは半信半疑だつた姑の心もしだいに打ち解けて半年が一年たつうちには、あの鬼のような姑がうちの「できた嫁」をどこへ行くにも連れ歩き、まわりから羨まれるほどになつて、

たまにはお前も実家の母に孝行しておいでと暇をもらつて帰つた娘が、もうこれは要らぬとさし出した例の紙包を見た母が一言、それは毒なんかではないただの風邪薬だよ。なぜそんな嘘をといぶかる娘に、あの時駆け込んだお前には何を言つても慰めにはならない、さりとて我が娘の胸中は痛いほどよくわかる。そこで一計を案じてお前をだましてしまつたのだ、どうかこの情知らずの母を許しておくれ、と泣きくずれる母の姿に、あややはり海よりも深きは親の恩と、涙にむせぶ娘の姿。相手を生かすも殺すも自分の胸三寸と思えばこそ生まれる心のゆとりが、捨て身の「演技」を可能にする。しかし、娘の長い一年はまた、母にとつても長く苦しい一年であつたはずだが、怨念を情愛に転ずる外に道はないと信じた、これも首尾よく功を奏した説得であらう。こ

の斬の肝要なところは、説得する母がされる方の娘の性格を十分に把握して「毒」を預けている点なのである。

## 二

たとえ正論であつても相手にそれが分からなければ意味がない。独りよがりの自己満足ではない。このことを忘れると説得は失敗に終わってしまう。相手のものの考え方や今相手が置かれている状況、時には相手が用意しているであろう反論まで考慮しなければ、事態は悪化するばかりである。

「猪武者」のように武力一辺倒の者に向かつて慎重論を説けば「臆したか」と弱虫扱いしてくる。働かずに寝てばかりいる怠け者にむやみに働くことを強要すれば「働いたらどんなよいことがあるか」と尋ねられ、「一所懸命に働けばやがて貯えもできて暮らしが楽になるではないか」「それから?」「そうならば遊んで寝ていることもできる」「ならば今の自分と同じではないか、どこに働かねばならぬ理由があるか」と切り返されるだろう。労働は楽をするため、こつこつ短絡的価値づけをしてしまつと相手によっては失敗する。

法定速度を守らないことが生き甲斐のような者に「狭い日本そんなに急いでどこへ行く」などと言えば「狭い日本急いで行けば早く着く」と逆ねじを食われる。交通事故の恐ろしさを説かないから失敗するのである。

芥川龍之介「羅生門」の「老婆」も「下人」の説得に失敗して着物をはぎ取られる破目になった。死人の髪を抜いていたところを若い下人に取り押さえられ、その理由を問ひ質される場面である。老婆曰く、確かに自分のしていることは悪いことかもしれぬが、それは自分だけの所業ではない、皆やっていることだ。干した蛇を干魚と偽って売っていた女もいる。しかしそうでもせねば飢え死にしまうから仕方なくしたので。自分もまったく同じで髪を抜き集めて鬻かひにして売らなければ飢えて死ぬだけだ。飢え死にしないためにやっている事なのだから許されるのだ、と。作者は時代背景を説明して、この時老婆や下人の住んでいた都は打ち続く火事や飢饉のためにすっかり荒れ果てていた。羅生門の楼の上に埋葬もされない死体がいくつも捨ててある、人心の荒廃もまた、ひととおりではないわけである。まだ若い下人はそんな時に突然暇を出されてしまい、何をどうするあてのないまま羅生門の下で雨が止むのを待っていたのだ。盗人にでもならない限り飢え死にするだけだ、とは思つたが、今すぐ

そうしようという決断はつきかねていた。悪を憎む正義感が残っていたからである。しかし老婆は違つた。悪いことは承知のうえで、飢え死にせず生きるためには悪いことも許されると言つた。確信犯である。悪が悪でなくなる条件を挙げて悪を正当化してしまつた。

下人がその時何を思つたか、作者は記していない。この「小面憎い」までの老婆の聞き直りが腹に据えかねただけかもしれないし、これで完全に盗人になる決断ができたのかもしれない。彼は老婆の着物を剥ぎ取つて逃げるのである。

つまり、この老婆は下人の「説得」に失敗したのである。なぜか。自分の置かれた状況をまったく理解していないからである。雨の夜、死体置場と化した楼の上、下人と二人きりで他には誰もいない。相手は若い男で太刀まで帯びている。自分はある程度取り押さえられた。そこで相手は「なぜこのようなことをするか」と問うてきた。自分の生命は相手の手中にあるが、今すぐ生命を取ろうというのではなさそうだ。ここで老婆は決定的なミスを犯した。まったく謝罪しなかつたのである。この状況から考えて謝罪し命乞いをするのが当然なのに、死人の髪を抜くことが生きていくための知恵だとも言わんばかりの聞き直りをした。世故にたけた老婆の知恵を振り回して、まだ若い下人の優位に立とうとした、それは相手の怒りを買つとは考えもしなかつた。盗人猛々しいとはこのことで、自分の立場も忘れて居直るなどは、説得にならないのは当然である。

余談であるが、下人が老婆の着物を剥いで逃げたのは、彼なりの、老婆という罪人に対する裁き、罰だとも考えられる。たしかに老婆の弁解は下人の心に潜む「悪への誘惑」を刺激したには違いないが、「どのような極限状況にあるうとも悪が正当化されることはない」という正義感を消し去るほど決定的ではなかつた、と言えないだろうか。だからこそ下人は老婆の着物を持つてただ逃げただけなのである。彼女の、悪を肯定する身勝手な理屈は下人の価値観まで侵すことはできなかつた、と解してみることは可能かもしれない。

## 三

さて、説得が成功する場合もそうでない場合も、そうなつた原因は一つではない。これは当然のことであつて、説得する側・される側が信頼によって深く

結びついていることは成功の前提である。しかしその場合でも説得のことは不適切であったり、論理的に無理があったり、先ほどの老婆の例のように立場を忘れてしまったりすると失敗する。説得される側の精神状態が説得を受け入れられないほど動揺していたり閉鎖的であれば、適切なことを用いてもうまくはゆかない。

諭<sup>た</sup>えてみると、医師の指示どおりに何種類もの薬を服用して快癒した患者のようなものである。治った原因は一つか？答はノーだ。すなわち、患者が医師を信頼していたこと。投薬の指示が適切であったこと。薬が効いたこと。自然治癒力が備わっていたこと。ひよっとすると複数の薬の相乗効果もあつたかもしれない。

言つたとたんに相手を沈黙させることができるような「神の言葉」があるわけではないのだ。それをよく知っているのは、説得という作業を日常的に行っている（はずの）医師・教師・刑事捜査官たちである。親はわが子が説得の手だが、彼らの相手はわが子ではなく守備範囲はずっと広い。責任も大きい。失敗したときの弊害もわが子の場合の比ではない。そこで彼らは二者択一の葛藤に苦しむ相手に対して、第三の選択を提示することもできる。98パラマウント映画「プライベート・ライアン」のジョン・ミラー大尉の例が想起される。アイオワ州出身のジェームズ・ライアン二等兵をヨーロッパの戦場から帰還させよという奇妙な命令を受けた大尉の小隊は任務遂行中に別の戦場で味方を失う。一人のドイツ兵を捕虜にするが、射殺しようとする兵と解放させようとする兵とに意見が別れ、対立してしまう。隊長の大尉は「解放派」なのだが、どちらの意見にも一理あつて、対立は深刻化し緊張状態となった時、大尉はそれまで隠していた素姓を語り始める。ずっと部下たちが関心を持っていた謎を自分から解いていくのである。自分は田舎の英語教師を十一年勤めてここへやって来た。ライアン二等兵がどんな男なのか、それは大した問題ではない。ただ自分は敵を一人殺すたびに故郷が遠くなるような気がする。だがライアンを連れ帰れたら、胸を張って妻のもとへ帰れる、そのための任務なのだ（だから捕虜は殺せない）、と。大尉のことは場面の緊張を解いた。部下たちは、それぞれが答を見つけたのである。大尉は殺伐とした戦場ではとすれば見失いがちな「人間としての誇り」に語りかけた。「逃がせば今後友軍に新たな犠牲が出るから殺す」、「捕虜を殺すことは違法だから解放する」という二者択一のほ

かに新たな選択を行った。それは、理不尽な命令に対して部下の誰もが持つていた疑問 たつた一人の兵のために八人の命を危険にさらすのか に答を与えたのであつた。とにかく、説得は成功した。だが大尉の告白があまりに状況にそぐわないので、部下たちが毒気を抜かれてしまった、とも考えられるが。

偶然に生じる条件も含めてみると、説得が成功するために必要なことをマニュアル化するのには難しい。ではその逆を考えてみるのはどうか。失敗例のなかから、共通している要素を集めておき、それらのマイナス要素を回避していけば、それがただちに成功に結びつかないとしても、説得される側との「悪くない関係」だけは保つことができる。次の機会に期待することもできる。昨今顕在化している「引きこもり」、彼らに向かつていたずらに激励のことは使わないというのもその一例である。うっかりすると相手が完全にこちらを拒否してしまい、説得どころではなくなってしまう。

藤沢晃治の指摘によると、説明を聞く上での不快感として、

- ① 関心のない話を聞かされる。
- ② 早口で分かりにくい。
- ③ 声小さくて聞きづらい。
- ④ 暑い（寒い）。
- ⑤ 飽きる。
- ⑥ 時間がムダ。
- ⑦ 理解できないと恥をかくのでは。
- ⑧ 説明がうんざりするほど長い。
- ⑨ バカバカしい。
- と列挙している。

④は空調を整えれば済むとしても、他は一項目でもあると、聞き手の拒絶に遭うハメになる。説明上手な教師ならばこれらのことは当然、認識しているにちがいない。では説明が下手な教師の与える不快感とは何か。前の⑨に追加してみよう。

- ⑩ 板書が乱雑。
- ⑪ 「社会で必ず役立つ」を連発するけれども、具体性がない。
- ⑫ 問題の全体像を示さないため、項目ごとの関連性がわからず、煩雑である。

⑬自分の授業を神格化し、聞き手の理解力を考慮していない。教師にとっては、毎日が「説得」、それが仕事である。一方、仕事柄、独善に陥りやすくもある。それを正すのは誰か。まれに「負った子に教えられる」こともあるが、やはり自分自身以外には考えられない。

#### 四

これからはいくつかの実例を取り上げて、説得を成功させるための条件を検証してみよう。

例①「科学」としての国語力とは？」(産経新聞 平成十四年十月二十七日付)

記事 同志社大学工学部 三木光範氏)

三木氏が最も強く主張する点は「これからの国語力に最も重要なのは論理的コミュニケーションであるにも拘らず、我が国の国語教育はそのための対応ができていないと思われる。」とあるように、

(i) これからの国語力には論理的コミュニケーションが不可欠であること。(筆者注・氏は同じ記事の中で「論理コミュニケーション」とも表記しているが両者の異同についての説明はまったく無い)

(ii) これまでの国語教育は論理的コミュニケーションではなく感性コミュニケーションを偏重してきたこと。(筆者注・同記事の副題は「論理伝達力を国語教育に取り入れよ」とある。したがって「論理的コミュニケーション」とは「論理伝達力」を意味すると考えられる)

補足説明が必要であろう。「国語力」という概括的用語は同記事の冒頭では「読み書き能力」と同じ意味で氏は用いている。ところが続いて「重要な視点は人間の感性を伝える国語力と、人間の思考を伝達する国語力の相違である。前者は文芸作品を読む力であり、また人間の感情を他人に伝え、共感を呼び起こす力である。一方、後者は人類の科学的資産を理解する力であり、論理を他人に伝え、合理的な意思決定を行う力である。」前者を「感性コミュニケーション能力」、後者を「論理コミュニケーション能力」と氏は命名する。さらに、今後は後者が重要視されるべきだと訴え、その理由は「感性コミュニケーションは比較的閉じた社会で有効である」のに対し、「論理コミュニケーションは人類にとって普遍的な価値を持つ科学的推論を基礎としており、ある程度の教育を受けた人であれば誰でも、お互いに合理的意思決定ができる基盤を与える

ことになる」と説く。

さて浅学非才の筆者にとって氏の所説はいくつかの新鮮な驚きに満ちていた。それらを挙げてみよう。

- (1) 国語教育について、見事に「極化してしまふ」論理には快刀乱麻を断つがとき快感さえも覚える。
- (2) 「感性」「文芸」「論理」といった、明確な定義なくして用いることに畏怖さえ抱く語を自在に操ることの小気味よさ。
- (3) 「人類にとって普遍的な価値を持つ」文芸は存在しない、と断じ、人間の真実という普遍性を呻吟しつつ追求した「文芸の先達」たちを刮目せしめるであろうこと。
- (4) 文芸偏重(?)の国語教育を続けてきた国語教師を断罪した後で、今後は論理的コミュニケーションのエキスパートになるべしとの更生の道を示してくださったこと。
- (5) 日本語で教育を行っている者であれば、誰でも論理的コミュニケーション教育に携わることができるはずである。なぜ国語の教師以外の教師の果たすべき役割が述べられないのか、という疑問。万一、新たに論理偏重(?)の国語教育が実施されてしまう場合に、必然的に起こりうる混乱や弊害になぜまったく言及されていないのか、という疑問。さらに、そういう形の教育を具体的にどう進めるかという設計図すら示されていないのはなぜか、という疑問。私の非力な脳細胞には久々の刺激であった点。

こうして、説得が成功するためには「まず隗より始めよ」という諺の認識も必要な条件であることが明らかになった。自らの実践を欠いた提案で相手を説得しようとするのは、寝ころがってテレビを眺めている親が「勉強しなさい」と子供に言うのと同じで、効果はない。相手の立場を思え、とはよく聞くことだが、実は、説得する側の自分の立場も十分に弁(わ)え(わ)ることを忘れてはならない。

#### 実践例①

「先生は嫌い。だからその科目は勉強したくない。」について。まず、「甘えちゃいけない」とか「けっきょく損するのは自分だよ」とか、お説教調は禁物だ。出席拒否まで行ったら重症だが、多くの場合は授業に出て、ノートぐらいは取っている。しかしその先生を好きになれない。このまま

じゃヤバイかな、ぐらいは思っているものだ。

そこで説得にかかる。まず、「生徒が先生を嫌いなのはあたりまえ。言うこととは聞かなくちゃいけないし、成績を管理されているのだから」と一般論。自分だって昔生徒の時は同じだった、と言外に匂わせる。嫌いでもかまわないよ、と言って少し負担を軽くしてやる。

次に、先生を解剖してしまう。つまり、「先生も人間なんだから、人格がある。そしてその科目の知識をたくさん持っている。その、人格と知識両方とも受け入れなくてもいい。知識はりっぱでも人格の変な人はたくさんいる、好きになれない先生がいたら、知識だけもらえばいい。その科目の大切なところを教えてくれる『機械』だと思えばいい。もし、知識も人格もすばらしいと思える先生に出会ったら、心から尊敬して好きになればいい。」

嫌いな先生を「機械」に見立てるのは生徒にしてみれば一種の快感である。相手が機械なら人格もないし、好き嫌いも関係ない。勉強への悪影響も少ないだろう。とにかく、「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」という生徒の言い分を認めないことである。

#### 実践例②

「人並みに勉強しているのに、いざ試験となると頭に入ってなくて点が取れない。」 について。

この生徒が試験までどのように勉強したかを聞いてみる。ノートの取り方・復習の仕方、試験対策。すると暗記すれば点が取れる科目がネックになっていることが多い。もしそこだけでも改善されれば、この生徒は自信を持てる、との見通しのもとで、記憶術を改良する作戦を立てる。「反復は最大の記憶である」に基づく「インターバル記憶術」である。覚え込む時間を減らす一方で集中する時間を増やす方法である。

試験範囲をまとめたノートを一通り、独りで目を通す。終わったらノートから離れてまったく別のことをする。音楽でも食事でも入浴でもテレビでもよい。これを一クールとして、試験前日と当日の朝に何クールかをこなす。時間配分は生徒本人に決めさせるが、記憶中は他の事はせず、独りきりになることがポイントである。ただ漫然と前夜を過ごし、当日朝になっても、学校へ行ってから何とかしようとし、騒然とした教室で無為な時間を過ごし、いい点が取れるはずはない。一クールの時間やトータルのクール数を生徒に決めさせると

ころがポイントで、すべてをこちらが仕切ってしまったのは、成功しても自信にならない。記憶は集中と反復の産物だと知れば自信もつくし、応用もきく。

#### 実践例③

「いじめや盗みがなぜ悪いか」 について。説得は予め、相手が返してくるであろう反論を封じてしまわなければ成功しない。この場合だと「みんなもやっているのに」「見つからなければよいのではないか」「軽い気持ちだった」といった反論、といったもただの言い訳であるが、これを説き伏せる必要がある。うっかりすると大人でも、誰かに見つかった時に悪が生じる、くらいのことは言いかねないので厄介だ。全智全能の絶対神を信仰しない民族は、見つからない要領の良い悪行をどこか容認する恐れを多とする。青少年がそれを感じ取らないはずはない。

この場合、「社会や集団のルール」として法や道徳をもつて諫めようとしても無理である。といって「被害者の人権」は抽象的になるだろう。そこでまず、「悪とは、不当に他の人の持つ諸権利を侵害すること」から出発する。法を犯すことが悪だ、とはあえて言わない。前に述べたような反論(?)が出て来るに決まっているからだ。「権利の侵害」と言ったのは、他の誰もやっていようとも、あるいは誰にも見つからなかつても、侵害が成立した時点で悪が生じていると知らしめるためである。「権利」が難しいならば「人生を楽しく過ごしたい気持」と言い換えてもよい。いじめも盗みもこういって、誰もが持つことを許されている気持を傷つけたり奪ったりするわけだから、悪いことなのだと説くのである。あくまでも悪を為す主体の「個人」の問題に帰するのだから、他の者は関係ないし、見つかるかどうかは副次的な問題であって、これも関係なくなる。

#### 実践例④

「今付きあっている彼女または彼に対する不満」 について。  
夫婦喧嘩は犬も食わぬ、というが、この種の問題が実はひじょうに難しい。うっかり一般論など持ち出そうものなら、疎きは親しきを隔てずという禁忌に触れてしまう。

これはもう、ひたすら「なれ染め」からつき合い始めに至る経緯にご登場願うしかない。惚気話に辛抱強くつき合って、時には思い出の写真まで引っぱり出させる。要は、二人がお互いに特別な相手なのだという歴史を思い出させて

やるのである。それをせずに、裁判官気取りで不平不満を処理しようとしても、誇張歪曲呪詛偏見、翻弄されるのは目に見えている。「いい時もあった。だからバランスが取れているのだ。」と説き、花でも買わせてはどうか。けだし、時の氏神やら月下氷人やらは樂ではないのである。

#### おわりに

説得の難しさは、そのタイミングでもあり、時間的効率でもある。運命の女神の前髪を捕える一瞬にも似た難しさ。聞き手の理解度に過剰に期待できない危うさ。それでも、私たちの胸を打つ説得のことばの数々に触れるとき、私たちはこのうえなく勇気づけられる。

いずれ稿を改めてそれらを紹介してみたい。

#### 参考文献

- 齋藤 孝「日本語ドリル」宝島社 平15  
 齋藤美奈子『文章読本』さん江」筑摩書房 平15  
 藤沢晃治『分かりやすい表現』の技術」講談社 平11  
 同 『』分かりやすい説明』の技術」講談社 平14  
 中村 明「文章をみがく」日本放送出版協会 平3

